

読書のすゝめ

その17

H 28

6 / 17

6月23日 沖縄県慰霊の日

第二次世界大戦において、沖縄は日米の最後の決戦地となりました。「鉄の暴風」と呼ばれる激しい空襲や艦砲射撃を約三ヶ月にわたって受け、民間人の四人に一人が命を失いました。沖縄守備軍牛島満司令官が自決し、組織的戦闘が終了したことから、沖縄県では戦没者の霊を慰めるため、毎年この日を「慰霊の日」としました。本校では修学旅行で沖縄を訪れています。沖繩の歩んできた歴史をしっかりと学び、これからの沖縄、日本を考えていきましょう。

(沖縄の抱えている問題は、まだ解決されていません。)



ひめゆり平和祈念資料館



『沖繩戦 ある母の記録』安里要江(高文研)

「和子が死んだのは、あとで考えると、六月の十六日ごろだったと思います。生まれて九ヶ月の短い運命でした。ローソクの火が消えていくみたいに、自然消滅でした。吐く息もだんだん細くなって、泣き声もなくなっていきました。ずっと抱き続けていたのですが、ふと気がつくと、体がだんだん冷たくなっていきます。死に顔も見られない闇の中です。手のひらが目の代わりをしていました。私は手のひらで和ちゃんの全身をなでまわしました。」

戦場で親を、洞窟の闇の中で赤ん坊を、さらに収容所の中で夫と長男を失った著者の克明な体験記録。(2011年の修学旅行で「平和講話」として貴重なお話をうかがうことができました。)



『ひめゆりの少女 十六歳の戦場』宮城喜久子(高文研)

「十六歳で死なせるためにおまえを育てたんじゃないから、学校に戻らないでここに残る父、「一高女の卒業証書はいらないから、学校に戻らないでここに残って！」と泣きながら止める母に「そんなことをしたら、みんなに非国民と言われるよ！」と言って『ひめゆり学徒隊』として戦場に出発した著者。そこで何を見、何を体験し、何を思ったか。生と死の境界線上で書き続けた日記をもとにまとめられた一冊。」

宮城さんは2014年12月31日、那覇市内の病院で逝去されました。享年86歳。ひめゆり祈念資料館の副館長として、また平和の語り部として活動されました。自分一人の体験ですら思い出すには辛いことであるのに、動員学徒222名の過半、123名(県立一高女42名、師範学校女子部81名。宮城さんは一高女の4年生だった)にのぼる死者全員について、その名と最期を伝えることを自分の使命だと決めて語り続けた方です。

【平和の礎 (いしづえ)】

国籍を問わず、軍人、民間人の別なく、全ての戦没者の氏名を刻んで、永久に残すため、平成7年6月に建設されました。屏風状に並んだ刻銘碑は世界に向けて平和の波が広がるようにとの願いをデザイン化したものです。

広場の中央には「平和の火」が灯されています。この「平和の火」は、沖縄戦最初の上陸地である座間味村阿嘉島において採取した火と被爆地広島市の「平和の灯」および長崎市の「誓いの火」を合火し、1995年6月23日の「慰霊の日」にここに移し、灯したものです。

「礎 (いしづえ)」とは、建物などの基礎の「いしづえ」を沖縄の方言で「いしじ」と発音することに由来するもので、平和創造の「いしづえ」となることを期待して付けられたものです。



まぶに おか べいわ いしじ
摩文仁の丘(平和の礎)